◎特集／対談

地域連携の未来を見つめて

伊賀市長 内保博仁 ＋ 学長 内田淳正

三重大学は地域圏大学として、さまざまな分野で産学官民連携に取り組み、
今年、三重大学伊賀研究拠点が伊賀市の「ゆめテクノ伊賀」内に誕生しました。
今回は新研究拠点を舞台として、内保博仁伊賀市長に
これからの活動内容や地域連携の未来について、学長と語り合っていただきました。

◎司会・進行
前田広人
まえだひろと
農学博士
専門分野は、分子微生物生態学・
環境微生物学・環境化学・応用微生物学

産学官民連携を担う三重大学伊賀研究拠点完成

司会　本日はお集まりいただきありがとうございます。2009年4月、三重大学伊賀研究拠点（以下、伊賀研究拠点）が「ゆめテクノ伊賀」にオープンしました。この新しい研究拠点を中心に、地域連携についてお考えをうかがえればと思います。まず、拠点ができるまでの経緯をご説明いただけますか。

内保　伊賀市では、以前から「上野新都市 ゆめぽりす伊賀」（※1）の開発を進め、「住む」「働く」「学ぶ」「憩う」の複合機能を有した未来の新しい都市環境の創造を目指してきました。そして、「住む」の部分ではハビネスタウン（住宅用地）、「働く」の部分ではクリエイトランド（産業用地）を造成し、「憩う」の部分では三重県の森林公園を活用することで3つの機能は整えたのですが、課題として残っていたのが「学ぶ」という部分を担う高等教育機関の誘致です。伊賀地域と三重大学とはこれまでも交流が活発で、早くから産学官民連携の研究拠点設置に向けて動いていたわけですが、2004年、1市3町2村が合併して伊賀市が誕生した後、さらにお互いの連携が進む中で、今回ようやく施設オープンのはこびとなり、大変うれしく皆さまに感謝しています。

内田　三重大学は地域圏大学として地域活性化のための連携融合事業を行うことを目標としてまいりましたが、伊賀市と大学の夢が合致し、結実したのがこの伊賀研究拠点です。ただ、その完成までには、さまざまな紆余曲折があり、それなりの時間が必要でした。遡れば1997年、合併前の上野市で上野新都市への高等教育機関設置方針が検討されたのを端緒に、2002年、上野市（現伊賀市）と三重大学が相互友好協力協定を締結し、第一歩を踏み出しました。そして2007年、伊賀研究拠点設置に関する協定書を調印し、いよいよ実現に動き出したわけです。その中で歴代の市長や関係者の方々、企業の方々、大学の先生方のご協力をいただけたということで実現できたと考えています。また、こうした人の輪と同時に、時代背景も味方してくれたのではないでしょうか。高等教育機関の設置を検討した当時、産学官民連携というものが国の施策の中心的な課題になってきていましたし、地方支援の動きも生まれてきていました。これも伊賀研究拠点成立の後押しになったと思います。

先端産業が集積し関西圏と中部圏を結ぶ文化の地

司会　伊賀の地に研究拠点を設置するメリットを含め、伊賀地域の特徴についてお話しいただけますか。

内保　伊賀市は三重県の北西部に位置し、北は滋賀県、西は京都府、奈良県と接しています。関西圏、中部圏の2大都市圏の中間にあることから、古くから交通の要衝として栄えてきました。また、伊賀流忍者や松尾芭蕉のふるさととして独自の文化を醸成し、緑豊かな自然環境にも恵まれています。歴史文化の薫る地域は、高等教育機関の設置にふさわしいものと考えます。

内田　私は松尾芭蕉が個人的に好きですが、芭蕉の俳句に息づく感性をこの伊賀地域の人は持っていると思うんです。感性は研究をしていく上で非常に大切で、ここには感性を学ぶのに適した豊かな土壌が広がっていると感じています。また、忍者発祥の地であって、忍耐と努力に秀でた地域性は他に誇れるものではないでしょうか。そして、市長のおっしゃる通り、関西と中部の経済圏をつなぐ伊賀地域の地理条件も重要だと思います。名阪国道は自動車専用道路で流通を担う大きな輸送路でありながら、亀山IC～天理IC間は無料で通行できます。これが伊賀地域の経済性を支える大きな要素であると感じております。三重県、特に津からしますと、中部圏、名古屋へのアクセスは比較的豊富にあり、連携も容易な状況にありますが、関西圏とのつながりがその分少し薄まっている傾向にあります。伊賀は関西圏との連絡という点で、地理上でも我々にとって重要な位置づけになり、関西在住の研究者との結びつきを今後深めるという意味でも有利であると認識しています。

内保　産業面では伊賀地域は昔からものづくりが盛んで、伊賀焼をはじめ個性豊かな伝統産業がございます。その一方で、医療・健康・福祉関連産業の集積を目指す三重県の「みえメディカルバレープロジェクト」（※2）によって、先端分野の企業誘致も活発化しています。伊賀市は構想の中で薬事産業集積地とされ、ゆめぽりす伊賀のクリエイトランドに薬事関連産業に進出いただき、産学官民連携の研究を展開しやすい環境が整っていると思います。

内田　そうですね。伊賀焼は桃山時代の最先端文化である茶の湯の文化と焼き物技術の結晶であったはず。伊賀研究拠点の活動が、それを現代に再現する契機になればと願っています。また、もともと伊賀は

「伊賀市は多くの先端産業に進出いただき、産学官連携の研究が展開しやすい環境が整っていると思います」

薬草学が盛んで、みえメディカルバレープロジェクトをはじめ医学的な素地が非常に豊かです。橋本病の発見者である橋本策（はかる）先生も伊賀出身で、先生の豊かな独創性は研究の基本であると思っています。つまり、三重大学にとって、伊賀の人が持つ素質は非常に有益なものであり、伊賀の人と協働することにより成果を出して地域にも貢献できるという点は大きなメリットでもあるわけです。今後、学内でも伊賀研究拠点は非常に重要な位置づけになっていくと考えています。

環境と食と文化をテーマに新産業育成を目指す

司会　伊賀研究拠点では「環境と食と文化」に関連する企業との共同研究、新産業の育成を目標に掲げていますが、具体的な活動内容をご紹介いただけますか。

内田　まず環境については、バイオマスエネルギーの高度化や自然環境自身の力を利用して環境改善や回復をするエコテクノロジー分野のほか、「伊賀マツタケ十字軍」と銘打ってマツタケの育つ背景を探り森林環境保全をテーマに研究を進める予定です。食については、食の安心・安全をテーマとするほか、獣害対策についても取り組んでいきます。それから、「伊賀テラピー」という言葉を新しくつくりまして、伊賀牛や伊賀焼、組紐など地域の産物を活かした癒しの科学をテーマとした研究です。例えば、信楽焼と伊賀焼の違いを科学的に探究して、新しいものを生み出していくというのも面白いのではないでしょうか。一方、文化については忍者が持つ情報網のテクノロジー、あるいは極限環境で耐える生命力の維持機構など忍者学の研究を目玉として取り組んでいきたいと考えています。当面、活動を開始する分野はバイオテクノロジーとエコテクノロジーですが、三重大学には松尾芭蕉の研究者もいますので、俳句を通した伊賀の風土の研究なども可能であり、文系の研究拠点としても発展させていきたいと考えています。

内保　環境につきましては、伊賀には産業廃棄物をはじめ一般廃棄物にも対応した全国でも有数の規模の処理場があり、社会ニーズに合った研究を通して今後の指針が導き出されればと期待しています。そして今、食分野で進めていますのが「伊賀市菜の花プロジェクト」です。概要をお話しますと、まず遊休農地や転作水田に菜の花を栽培し、美しい景観を皆さんに楽しんでいただく。次に、そこから菜種油を搾って地産地消を進める。さらに使用後の廃油を集めてバイオディーゼル燃料を精製し、農業用機械などに利用していくというもので、バイオディーゼル燃料の精製プラントがこの建物に隣接してできました。また、獣害対策、特に猿、鹿、猪には困っていますので、その課題にも何らかの方策が見つかればと期待しています。

内保博仁 うちほひろひと
伊賀市長
龍谷大学卒業　阿山町長、伊賀市助役、
伊賀市副市長を経て、2008年11月より現職

「大学の持つ研究力と中小企業の持つ個性的な技術力を融合させることが、地域連携の一番重要なポイントです」

内田淳正 うちだあつまさ
学長　医学博士
専門分野は、整形外科学

内田　今おっしゃったバイオディーゼルについては、本研究拠点のスタッフが製造工程の高度化や副産物の有効利用について研究支援を行うことになっています。このような活動はまさに大学と伊賀市がお互いに助けあうモデルとしてとても重要であると思います。三重大学にはこの他に四日市フロント（※3）もありますが、伊賀研究拠点を産学官民連携の核に位置づけ、スタッフも常駐させるなど大学としても大きな実験であり挑戦です。また、ここは目に見える成果をはっきりと出せる拠点でもあります。他のフロントは、どちらかと言えば大学にあるシーズをどう地域に提供するかということに重点が置かれていますが、ここはシーズとニーズを合致させインキュベーション（起業支援）によって新産業、新プロダクトを創造していくことを目的としています。三重大学としては多様なマーケティングを背景に、新産業育成を全面的に支援していきたいと考えています。

市民とともにまちづくりや人材育成にも貢献を

司会　今後の地域づくりに関する構想や伊賀研究拠点に対する期待をお聞かせ願えますか。

内保　伊賀市では、市民一人ひとりが「自分たちのまちは自分たちでつくる」という住民自治の意識を高め、市民とともに「ひとが輝く 地域が輝く」伊賀市の実現を目指しています。その中でまちづくりの核の一つとして、上野城を中心とした城下町を中心市街地と位置づけて、もう一度活性化を図る計画を推進しています。また、周辺の田園地帯や市の面積の6割を占める森林も伊賀市の貴重な財産ですので、それぞれの地域の良さをしっかり残しながら町としての形をつくっていくべきと、10年、20年先の伊賀市のグランドデザインを描いて市民の皆さんにご説明し、未来像の共有を図っています。また、この地域は一つの盆地の中に伊賀市と名張市があるわけですので、一つの圏域という形で行政を進めていかなければならないと考えています。消防については2～3年先を目途に広域消防の実現に向けて作業を始めていますし、さらに近いうちに両市の市立病院の統合を議論していかなければならないでしょう。将来の伊賀地域を見たときに、まだまだ多くの課題がありますので、これまで以上の連携した取り組みを三重大学

にはお願いしたいと考えています。

内田　ここではセミナーや研修会を開催し、一般市民の方への啓発活動を行っていきますし、将来、三重大学への入学を希望する中学生や高校生の皆さんへの学習支援活動なども視野に入れています。人材育成に力を入れていくことで、「ひとが輝く」という側面において拠点が果たす役割は大きいものと考えます。また、市立病院の医療連携や地域医療のあり方を研究する拠点としても、おおいに貢献していきたい。三重大学の人材と伊賀市民、名張市民が集まって、ここで今後のあり方を方向づける。それがこの地域の住民の健康を守る基本になるだろうと思います。

内保　藤堂高虎が上野城を築城し、ちょうど2011年で400年になるので、伊賀を全国へ発信するためにNHKの大河ドラマを誘致したいと思っています。津市でも高虎が築城した城を復元するという話もあるようですし、両市で協力し合って誘致運動ができればと考えています。その際には三重大学の歴史の先生をはじめ、いろいろな方のお知恵をお借りしたいと考えています。

内田　やはり伊賀と三重大学の持っているシーズとニーズ、関西圏のシーズとニーズをどう結びつけていくかというのが一つの課題だろうと思っています。また、本研究拠点の意義は大学と企業との協働にあり、伊賀の企業にいかに三重大学が力添えをできるかが試されているとも言えます。大学としては全力を挙げて新たな課題を見つけるとともに、さまざまな取り組みを進めていきたいと考えています。

地域連携の未来像を伊賀研究拠点から発信していく

司会　最後に、地域連携の未来展望についてお考えをお聞かせください。

内田　地域連携は、これからの地域活性化の基本となるのは事実です。地方分権が叫ばれていますが、今後、地域の中小企業をいかに支援するかが、私はこの地域の再生だけではなくて日本の国の根幹となっていくと思うんです。中小企業は独自で技術開発や研究開発できる余力に乏しいところがあるのではないでしょうか。だからこそ、大学の持つ研究力と中小企業の持つ個性的な技術力を融合させることが、地域連携の一番重要なポイントです。それが地域の活性化に欠くことのできない基盤になるのではないでしょうか。三重大学は企業との共同研究数は240～250件で全国17位、中でも中小企業との共同研究数では3位に入り、地域の中小企業との連携は日本でも有数だと胸を張っているわけです。しかし、まだまだアピール不足で社会的にはあまり認知されていません。地域連携をさらに推進するために、今後は、もっと我々の連携実績を社会へアピールしていくことも必要だろうと考えています。

内保　最近までは地方自治と言いますと、行政は対市民、市民だけを見るという構図でしたが、学長がおっしゃった地方分権という動きの中で、やっと行政が大学や企業の方に目を向けるようになってきています。少しずつですが伊賀市も住民自治協議会という組織をつくって、地域住民だけでなく地域の企業にも参加してくださいとお願いしているところです。これからのまちづくりは、地域の住民と企業、NPOなどいろいろな皆さんが参加し、それぞれに知恵を出し合って進めていかなければなりません。行政と地域住民と企業とがうまく連携できるように、伊賀研究拠点の中で三重大学とともに考えていきたいと思っています。

内田　時代の変化に対応することは大切ですが、やはり研究拠点は時代の流れに流されることなく、静かなところでじっくりと腰を落ちつけて、ある程度の期間をかけて成果を創出していくことが大切です。三重大学はこの伊賀研究拠点を舞台に、伊賀市と協力して20年、30年先を見つめながら、産学官民連携による研究基盤を形成してまいりたいと思います。

司会　本日はありがとうございました。

(※1) 上野新都市 ゆめぽりす伊賀
三重県伊賀市の約300ヘクタールの丘陵地に、自然との調和を目指して誕生した新しい都市。1988年から事業に着手し、計画人口は約6,000人。

(※2) みえメディカルバレープロジェクト
三重県の3つのバレープロジェクトの一つ。県内の大学や研究機関、企業、サービス事業者などが連携し、競争力のある医療・健康・福祉産業の創出と集積を図ることを目的とする。

(※3) 四日市フロント
企業や自治体などへの技術支援やセミナーの開催など、北勢地域における三重大学の地域連携の拠点として活動。三重北勢地域地場産業振興センター（じばさん三重）内にオフィスを構える。

三重大学伊賀研究拠点

伊賀地域の産業振興と文化力の向上を目指し、経済産業省と伊賀市の補助を受け、2009年4月に「ゆめテクノ伊賀」がオープン。産学官民が先端分野で共同研究を行う研究開発機能、大学の「知」を活用し新産業を育成するインキュベーション機能、研究者や生産者、技術者の交流や一般市民への文化的啓発・交流活動を行う人材育成機能を有し、テクノホール、インキュベーション室、付属グリーンハウスなどの施設を備える。三重大学は「ゆめテクノ伊賀」内に伊賀研究拠点を設置し、産学官民が連携して「環境・食・文化」に関する新産業の育成を図るとともに、文化的啓発活動を通して地域活性化に貢献することを目指している。

1.「ゆめテクノ伊賀」外観
2.研究室　3.付属グリーンハウス

〒518-0131 三重県伊賀市ゆめが丘一丁目3番地の3
産学官連携地域産業創造センター「ゆめテクノ伊賀」内
TEL：0595-41-1071　FAX：0595-41-1062
URL：http://www.iga.mie-u.ac.jp/（三重大学伊賀研究拠点）　http://yumetechno.jp/（ゆめテクノ伊賀）